

説した點は樗牛の日蓮論に於ける出色の點である。但し此の警醒を以て末法の道師上行の再現たる日蓮の人格を本位とし、日本國を以て單にその興教の方便の如くに見る文句が、處々に見えて居るのは所謂法と人との關係に於て人にのみ重きを置き、又法と國との關係に於て法即ち理に偏した見解である。上人の信は此以上に法即ち真理と人格との双全法國冥合の理想に於て、特に大切な消息を傳へて居るが樗牛の見は此の一點に於て尙ほ不備であり、少なくとも人をして上人を誤解せしめる文句があるとは、矢張吾人の指摘した論點を指摘したものと思はるゝが姉崎氏の所論は流石に麻姑を傲ふて痒を搔くの概がある。

◎日蓮弟子檀越を戒む

併し茲に一つの疑問がある。其れは文永十一年の蒙古來寇を距ること五年即ち弘安四年五月二十一日日

蓮の豫戒した如く、蒙古の大將阿塔海范文虎等が十萬の兵を率ゐて再び西海に來り襲ふた時、弟子檀越等が之れぞ法華謗法の現罰なりと謗り且つ誇つた時日蓮が

「小蒙古の人日本國に寄せ來るの事我門弟並に檀那の中に、若し佗人に向ひ將た自ら言語に及べからず、若し此旨に違背せば門弟を離すべき等の由存知する所なり、此旨を以て人々に示すべく候なり」

と嚴戒したことである。余は日蓮が此くの如き嚴戒を門弟並に檀越に與へたことが身延隱棲後就中晩年に於ける日蓮の心理状態を解剖するに重大の關係を有するものであると信ずるものであるが、此の嚴戒に對して未だ何人も解釋を試みた者のないのは淺識なる余の甚だ遺憾とする所である。余は之に對する卑見を次項に述べて見やうと思ふ。

知てしらぬ身の程悲し秋の暮  
幾秋はなぐさめかれつ母ひとり

宗教講話 (其十五)

大川周明

マホメット及び其宗教

三 マホメット 下

マホメットの生涯はヒジラを以て載然たる一期を劃せり。メッカに於ける窮餘の豫言者は、今や一朝にして有力なる都市の首長となれり。ヤトリブは其名をメチーナト・エン・ナビ即ち「豫言者の都」と呼ばれ後には單にメチーナ即ち「都」と呼ばるゝに至れり。而して是と共に純乎として宗教的なりしマホメットの面目は、爾來著しく政治的色彩を帯び來れり。コラーンの如きも、そのヒジラ以前の章句が多く燃ゆるが如き宗教的情熱に満ちたるに反し、メチーナ移住以後のものに至りては、概ね立法的となり、乾燥無味にして讀むに堪えざるもの多し。而てこれ實に彼の境遇に伴へる自然の結果なりき。

マホメットのメチーナに入るや市民は歡乎して之を迎へたり。多くの富豪は争ふてマホメットが己れの家に寓せん事を請へり。而して彼は其の一人を満足せしむるは聽て他を失望せしむる所以なるを知り唯だ神意に従ひて己れを乗せたる駱駝の導く家に寓せんと告げたり。然るに其の駱駝はアブー・アユーブの門前に足を停めしかば、暫く彼の家に居り、後に極めて質素なる家を造りて之に移れり。此後に於けるマホメットの施設を見る人は、その政治的手腕の非凡なりしに驚く可し。彼は先づ基督教及び猶太の會堂を參酌して新たに回教の會堂を建て、信者の宗教的情熱を養ふに努めたり。彼は人と人とを結ぶ絆は血縁に非ずして一神の子たる事にありと教へ

「道」第67号(1913.11)

て、アウス、カスラジ兩族の間に行はれたる多年の軋轢を融和し、嚴に私闘を禁じ、自ら判官となりて訟獄を斷せり。彼はメッカより彼に従へる信者等が悉く經濟的困難に陥れるを見て、メディーナ人の各信者は皆なメッカよりの信者一人を扶養す可き制度を設けたり。またメディーナにはマホメットの宗教を信せず、従つて異部族の出なる彼の突如として勢力を彼等の上に揮ふ事を屑しとせざる一派あり、アブダラー・イブン・ウバイを首長として時にマホメットに反抗せり。彼は其の政略上先づ彼等の甘心を求め、自己の勢力の漸く加はるに及び、之を威壓して悉く回教に歸せしめたり。また前述の如くメディーナには多數の猶太人あり、陰然として一敵國をなせり。マホメットは當初に於て能ふ限りの好意を示して彼等を懐柔せんと試みたり。彼は自己の信仰が猶太教と背馳せざる所以を力説し、猶太教の定むる斷食を守り、日曜日をも以て安息日と定め、信者は祈禱

に際してメッカに向はずしてエルサレムに向ふ可しとの規定をさへ設けたり。然れども猶太人の執拗なる頑として耳を彼に貸さず、却つて彼を待つに嘲弄と輕侮とを以てせしかば、マホメットは遂に其態度を一變して、極力彼等を迫害排斥し、先の規定を徹廢して金曜日を以て安息日となし、信者は復たメッカに向つて祈禱す可き事を定むるに至れり。斯の如くにしてメディーナに於ける地盤は固められ信者の數は日に加はり、教團の組織は確立せられたり。是於マホメットは『亞拉比亞』の聖地を得ん爲には其の商業を妨害するを以て最上策となすを知りシリヤに往復するメディーナの隊商を途上に掠奪せしめたり。彼は亞拉比亞古來の習慣を無視して、假令一切の争鬪を禁止せられたる聖月に於てなりとも、アララの爲には異教徒と戦ひて可なりとせり。而して戦勝によりて得たる分捕品は、其五分の一を彼に

納めて、自餘は悉く戰士等の間に分配す可しと定めたり。彼は天國は劍戟の蔭に在りと稱して、聖戰の爲に斃れたる戰士は、直ちに天上の樂園に至る可きを教へたり。曰く、聖戰に斃れたる者は、一切の罪惡を赦されん、聖戰の爲に受けたる傷痕は、天國に在りては、火の如く耀き、蘭麝の如く香ばしく、聖戰の爲に失ひたる四肢は、天使の翼を以て補はれんそれ聖戰の爲に流せる一滴の血は二ヶ月の斷食と祈禱とに勝れりと。彼は是の如くにして其信者を鼓舞し策勵せり、而して其の最初の結果をバドルの大勝に於て見たり。

時は紀元六二三年の秋、一千の駱駝に貨物を滿載せるメッカの隊商は、アブー・スフヤーンに率ゐられてシリヤよりの歸途に在りき。時恰も聖月に當りしかば、彼等は安んじて家郷に向ひつゝありしに、マホメットは之をバドルに擁して其貨物を奪ひ、メッカ人に對して最初の大打撃を加へんと決心せり、ア

ブー・スフヤーン之を聞知して大いに驚き直ちに路を換へてバドルを迂回し、一方急使を馳せて援をメッカに求めたり。メッカ人は飛報に接して今更の如く彼に對する憤激の情を燃やせり。かくて駱駝に乗るもの七百、馬に乗るもの一百、歩するもの二百、合せて一千の戰士は立どころに軍容を整えて、直ちにバドルに急進せり。彼等は途にアブー・スフヤーンの使者に會し、隊商の幸にして掠奪の難を免れたるを知れり。されど此期に乗じてマホメットに對する年來の憤懣を晴らす可くバドルに向つて殺倒せり時にマホメットの軍は僅かに三百にして、而も低地に陣し、敵は三倍の優勢を以て砂丘の上に陣せり。されどマホメットは恐れざりき。彼は新たに建てられたる祭壇に立ちて祈れり。アララよ、吾等今にして破れなば、地上に在りて汝を拜するものは誰ぞ。今日の勝利をして必ず吾等の上にならしめ給へと。戦 酣にして敵軍の攻撃益々急を加へマホメット

の兵の將に潰敗せんとせし時、彼は天使長ガブリエル及び三千の天使が、天上より來り救ふを見たり。彼即ち勇躍して祭壇を下り、一握の砂を敵軍に向つて投じて曰く、見よ、天使雲の如く來りて吾等を援くと。此聲雷の如く轟き渡るや、味方の勇氣は急に百倍し、將に崩れんとせし陣列を正して勇敢なる突撃を試みたり。而して敵は天軍のマホメットを助け彼等を壓するが如く感じたり。忽ち形勢は一變せり。遂にメツカ軍は死者七十、捕虜七十とを殘して悉く先を争ひて敗走せり。而してマホメットは茲に不思議の勝利を得たり。バドルの役は固より一小戰に過ぎざりき。されど其結果よりすれば、實に回教の歴史に於て最も重要な戰役なりき。此一戰によりてマホメットの信者は、彼に對する歸依の情を百倍せり。而して此時より彼の名は全亞拉比亞の人心を魅する魔力を有するに至れり。

を以て終局を告げたりしに非ず。メツカ人は雪辱の戰争を起すべく準備せり。而して準備なるやアブー・スフヤーンを將軍とし、三千の兵を以てメディーナに進軍せり。マホメット即ち一千の兵を率ゐ、敵をウフド山麓に邀へ撃ちて、殆ど之を撃破せんとせり。然るに後方に在りしマホメットの弓兵は、敵軍敗れたりと見るや、戰終るまで一步も陣地を動く可からずと命せられたりしに拘はらず、掠奪品を得んと欲に驅られ、列を亂して戰場に向ひしかば、敵軍の騎兵これを見て急にメディーナ軍の背を突けり。於是形勢忽ち一變してマホメット軍の大敗となり、彼の伯父にして『回教の獅子』と呼ばれたるハムサは敵箭に死し、マホメット自身も亦敵の投せる石片に當りて氣絶せしが、幸に敵の追撃するなかりしを以て辛くも一命を助かり、敗餘の殘兵を率ゐてメディーナに歸れり。されどメディーナ人は此一敗によりて彼に失望する事なかりき。敗軍のメディーナに入るや一婦人あ

り迎へて問ひて曰く、吾父は如何にせしや。兵士答へて曰く不幸にして戰死せり。曰く然らば吾夫は如何。曰く彼も亦戰死せり。曰く、然らば吾子は如何。曰く彼も亦戰死せり。曰く然らば主マホメットは如何。兵士等口を揃へて曰く、生きて吾等と偕に在り婦人之を聽いて喜んで曰く、主にして生存せば吾等の不幸は言ふに足らんやと是の如くにしてメディーナは敗戰の厄を悲しむ前に先づマホメットの無事を祝せり。而して彼はメディーナ人に向つて、神の偉大な恩寵を一族に垂れんとするや、先づ之をして窮地に陥らしむる事を教へ、能く士氣の沮喪を防ぎ得たり。

爲す所なきに乘じマホメット屢々突出戰を試みて敵軍を破り、且反間苦肉の策を講じて敵軍の將士を離間したり。かくて兩軍相對峙すること四十日、一夜暴風雨俄かに至りて敵軍の天幕悉く破れしかば、アブー・スフヤーンは遂に退却に決し、殆ど敗軍の如くにしてメツカに歸れり。メツカ軍の退却するや、マホメットは直ちに猶太人の一支族クライザ族を、メディーナ市の居城に襲ひて之を陥し、悉く其男子を屠り、其女子と小兒とを奴隸とせり。これクライザ族が先にアブー・スフヤーンに應じてマホメットに抗せるが故なり。

翌々六二七年アブー・スフヤーンは更にナジド族と同盟し、一萬の兵を率ゐて北上せり。マホメット即ち濠を穿ち土壁を築き、守備を嚴にして敵軍を待てり。然るにメツカ人は固と攻城戰に慣れず、加ふるに時恰も冬にして寒氣に苦しみ、空しく城外に陣して

連年の交戦によりてメツカは疲弊したり。而して部族の興廢を賭したる最後の大遠征は爾く失敗に終れり。今やマホメットの眼中にはメツカ人なきに至りぬ。於是彼はカーバ參拜を企て千五百人を率ゐてメツカに向へり。彼はカーバ參拜以外に他意なきを示さんが爲に、其部下をして單に一劍を帶ばしめ

固く自餘の武器を携ふる事を禁じたり。蓋し劍は順禮者に許されたる唯一の武器なりし也。されどメッカ人は彼を信せず、武装して其來るを撃たんとせしかば、マホメット即ちフダイビヤに停まり、此處にメツカの使節と會して十年間の休戦を約せり。而して休戦條約の中にマホメットは翌年の順禮期に於て三日間カーバに參拜し得との一條ありき。固よりメッカ人は未だ彼の豫言者たる事を承認せるに非ず。彼はたゞアブダラーの子としてカーバ參拜を許されたりしのみ。然れども此一事はメッカ人がマホメットに對して其抵抗力を失へる事を白狀せるものなり。彼はフダイビヤより歸りて猶太人の富有なる都市カイバルを征服し、悉く其土地を沒收したり。而して翌六二九年二月、愈々其敵によりて公認せられたるメッカ參拜を行へり。彼は八年以前にメッカ人の迫害に堪え兼ね、タウルの洞窟に身を隠すこと三日危くも死を免れてメチーナに亡命せし時に跨れる其

の駱駝に乗り、二千の信者を従へてメッカに入れり。而して此參拜に於て彼は最も有力なる二人の信者を得たり。一は先にウフドの役に於て彼を敗りしカリドにして、後に「アラアの劍」と呼ばれし人、他は武勇拔群のアムルにして、後に埃及を征服せる人なり。マホメットは今や回教を以て世界教たらしめんとせり。彼は一切の不信者を克服するまで聖戦を續く可しとの啓示を受けたり。かくて彼は先づ東羅馬帝國、波斯、アビシニヤの諸國に使節を派し、己れを神使として承認し、回教を信じて己れの臣民たるべき事を求めたり。されど彼の使節は到る處の朝廷に於て、唯だ嘲弄と輕蔑とを以て迎へられ、僅かに埃及の太守たりし希臘人が、彼の甘心を買はむが爲に兩美人を彼に贈れるありしのみ。彼はまた死海の南東に在るムタを征服せんとし、養子ザイドに三千の兵を興へて之を攻めたりしが、戦ひ利あらずしてザイド爲に死し、唯だカリドの在るありて能く敵軍の

追撃を退け、敗兵を收めてメチーナに歸るを得たりされど翌月彼は更にアムルを遣はし、遂にムタを平定して、其勢力をシリヤの國境に及ぼすに至れり。偶々此時に當りてメツカ附近の二小部族の間に私闘あり、而して攻撃せられたるは、マホメットと同盟せる部族にして、攻撃せるはメツカに左袒せる部族なりき。マホメットは此出來事に於て逸す可からざる好機を見出だせり。彼は此私闘を以てメッカ人がフダイビヤの休戦條約を無視せるものとなし、一舉にしてメッカを克服するの口實となさんとせり。メッカ人はマホメットの意を知りて堪え難き屈辱と忿懣とを感じたり。されど今や彼等は起ちてマホメットの無名の師を邀ふ可き勇氣と實力とを有せざりき。彼等の首長アブ・スファヤーンは、メチーナに急行して百方マホメットの意を翻へさしめんと努めたり。されどそは遂に無効なりき。

六三〇年正月元日マホメットは一萬の兵を率ゐ

てメチーナを發せり。行軍八日にしてメッカを距る一日程の地に達し、夜に入りて陣を高地に布き、盛んに篝火を焚きて大に勢を張れり。メッカの民北方の天の紅きを見て、マホメットの大軍を催ほして來り攻めしを知り、驚愕殆ど爲す所を知らず、再びスファヤーンをマホメットの陣營に急派したり。而して會見の結果スファヤーンは最早降服以外に採る可き途なきを知りて、「アラアの一神を信じマホメットを以て其豫言者とする事」を承認したり。かくてマホメットの軍は殆ど何等の抵抗をも受けずして、四方よりメッカの聖都に入り、忽ちにして之を占領し了んぬ。されどマホメットは決して殘酷なる征服者に非ざりき。彼は其家に留まり、又は其武器を棄てたるメッカ人に對しては、何等の危害をも加へざる可きを約し、嚴に其將士に令して掠奪殺傷を禁じたり。かくて僅かに四人のメツカ人が飽迄も彼に抗したる故を以て其頸を刎ねられたる外にメツカは何

等の暴虐を蒙むらすして濟みたり。固より彼は一切の偶像を破壊せり。カーバの周圍に在りし數百の偶像も、私人の家に祀られたる偶像も、悉く掃蕩せられたり。されど彼は舊來の宗教的儀式は概ね之を保

メツカ一度びマホメットの手に歸してよりは、自餘の諸部落の運命知る可きのみ。彼は全亞拉比亞に向つて改宗を迫れり。而して多くの部落は彼の要求を悦ばざりき。されど若し之を拒むに於ては、直ちにマホメットの戦慄す可き呪咀を受けざる可からずかくて彼等は唯だ黙して彼の命に屈從する以外に、自ら全ふる途を有せざりき。曾て石を投じて彼の來るを拒みしタイフ人は、マホメットの來り攻めざるに先ちて使者を派し、私通高利貸及び飲酒の三事を許容せられむ事を乞へり。而してマホメットは言下に之を拒めり。使者は更に乞ふに三年の間女神ラッパの禮拜を許されん事を以てせり。而してマホメッ

とは一時間の猶豫をも與へずと告げたり。使者は最後に哀願して祈禱の義務を免除せられん事を乞へり而してマホメットは決然として之を拒めり。是の如くにしてタイフ人は悉くマホメットの要求を容れ、其教ゆる儘を信奉せざるを得ざりき。彼は總て之と同一の筆法を以て他の不信者に向へり。而して亞拉比亞に在る一切の偶像は、彼の命令の下に容赦なく掃蕩せられ始めたり。

今や宗教的並に政治的に亞拉比亞の首長となれるマホメットは、六三二年五月、多數の信者を従へてメツカに巡禮し、自ら一切の儀式を奉行して、之を以て全回教徒の模範たらしめたり。彼はカーバの黒石に接吻し、其小祠を七周し、ゼムゼムの井戸に聖水を飲みメツカ郊外の兩丘の間を疾駆し、一定の場所に於て七個の石を投げ、一定の山間に犠牲を屠る等の諸儀禮を制定せり。此等の儀式は總て亞拉比亞に來の宗教的儀禮を、多かれ少なかれ改革せるものに

して、彼は此事に由りて自己の宗教に亞拉比亞の國民的色彩を加へたり。而してそは回教をして亞拉比亞に傳播するに容易ならしめたり。

メツカ參拜を終へてメチーナに歸るや、マホメットは先に使節を派して拒絶せられたる東羅馬帝國に向つて、更に劍と火とを以て改宗を迫らんとし、茲に大遠征の準備に着手せり。されど未だ兵を動かさざるに先ちて激しき熱病に襲はれ、病むこと十四日にして遂に没せり。時は紀元六三二年六月八日なり。彼の死は其信者をして哀悼の極殆と狂亂せしめんとせり。オマルの如きは、短劍の鞘を拂ひつゝ、若

し吾等の主死せりと言ふ者あらば、直ちに其の心臓を貫かんと叫べり。此間に在りて獨りアブー・バクルは能く沈靜を保ち得たり。彼は靜かに群衆に向つて言へり。吾等の拜すべきはマホメットなりや、將又マホメットの神なりや。それマホメットの神は永遠なれど、マホメットは死せざる可からず、彼は一切の人間の運命を経験せるのみと。アブー・バクルの言は能く回教徒の心を鎮めたり。而して彼等は教祖の遺志を成就して、其宗教を世界教たらしめんが爲に、劍を取りて世界傳道を始めたり。

# 日露戦争及媾和

(十一)

石川半山

## 義和團と露國

義和團の始まる頃、關東州に駐屯して、アレキシ

エフ總督の管下に在りたる露國の兵士は左の如き者